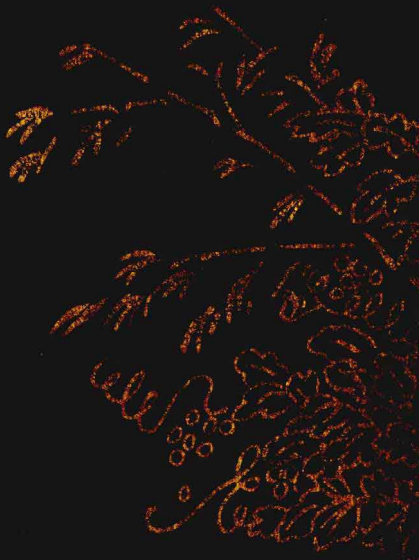

有島武郎全集

第十二卷

大正十四年三月十五日印刷
大正十四年三月二十日發行

有島武郎全集

第十二卷

（非賣品）

著者　有島武郎

發行人　東京市牛込區神樂町二丁目十一番地　足助素一

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市牛込區神樂町二丁目十一番地　叢文閣

電話牛込　二五七三番
振替口座東京　四二八八番

有島武郎全集　第十二卷

目次

日記
觀想錄第五卷……六〇七
觀想錄第六卷……七二九
觀想錄第七卷……七七五
觀想錄第八卷……八二三
觀想錄第九卷……八六五
觀想錄第十卷……九七三
觀想錄第十一卷……一〇四七
觀想錄第十二卷……一〇八五

觀想錄第十三卷……一一三三
觀想錄第十四卷……一一七一
觀想錄第十五卷……一二一五
觀想錄第十六卷……一二四一
觀想錄第十七卷……一二八七
觀想錄第十八卷……一三三三
日記第十九卷……一三七三
日記第二十卷……一四一七
日記第二十一卷……一四五五
有島武郎著作年表……一六
有島武郎年譜……三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

口　畫

著者の家族（一八九六年八月二十四日）……（巻頭）
著者肖像（一九二三年五月五日）……（巻頭）

有島武郎全集　第十二巻　目次　終

觀想錄　第五卷

自一九〇三年六月十六日（明治三十六年）
至一九〇四年三月二十九日（明治三十七年）

於東京麹町區下六番町拾番地

一九〇三年六月

牝馬の歌

ひづめの　あがき　ちを　とゞろかし
いくさの　ちまたも　おぢ　おそれず
いなごの　ごとく　かぜを　とびて
あまかけりし　めうま　こを　うしなひぬ
けふ　のりて　なつのを　ゆくに
さみしげに　とほきを　みやる　まなこの　うるみ
なにの　おもひでか　あとふりむきて

いなゝく　こゑ　ながく　くもに　いる
なづみ　がちなるを　しひて　おへば
しばらく　はしりて　また　なづみぬ
とぼとぼと　あゆみ　おそく
あかね　きえて　よも　たゞあをき　ゆふぐれ
さと　なほ　おちなる　みづに　そうて
うなだれし　まゝに
はや　なかんとも　せず

まこくは

やまぢ　ゆくに　まこくは　さけり
みざりし　みとせを　そのまゝ
なつかしき　はな　つゆを　ふくむ
あゝ　いきよ　ひと　いきよ　ひと
ことしも　このはな　きよく　さくに

六月十六日。火曜日。

雨は降らざりしかども雲絶えず空を被へり。余の北行は今日と決定せられぬ。父上は朝の食卓に、余が彼處に到りて土地の爲めに爲すべき凡ての措置を言ひ給ひき。室蘭支廳か狩太村の役人の間には、一種の不正が行はれつゝあるが如し。余は十分の注意を以て、之れを視察し且つ之れを矯正せんとするなり。されども富を得んとするものは――要之凡ての口實理論を除き去る時は、農場經營の眞目的は當然富を得るにあり――憐れむ可きかな。彼れは常に人に對して疑惑の眼を張らさる可からず。常に己れの爲めに思ひなやまざる可からず、常に貧しきものを使役せざる可からず。世に最も憐む可き職業ありとすれば政治家と實業家なる可し。

それより今夜出發の爲めの諸準備をなし、隨分多忙を極めたれども夕刻に及び凡て完成せり。かくて夕刻壬生馬に送られて上野停車場に到り、午後六時の汽車に搭じぬ。同乘者一人のみ。田園初夏の射翠到る處に車窓を擁し、長く長く自然の裡に入らざりし我は、日暮に到る迄車窓より首を回らさざりき。點燈の時溶々たる利根川の上流を渡る。山川共に暮れて晩靄遠く懸る。余は不圖去秋機動演習の時、薄暮その下流を渡りたりし當時を思ひ起しぬ。かくて今日の日暮れき。

余は車中にあり "How We shall think of Christianity" の中 "Christian Power" を讀み終らんと勉めたれども燈暗くして眼の疲勞する事甚だしかりしかば、寧ろ早寢するに如かじと思ひて横はりたれども、寒威と諸種の聯

想と交々襲ひ來り容易に眠る事能はず。覺めてはまどろみ、まどろみては覺めて漸くにし此長時間を明かしぬ。

六月十七日。水曜日。

曉明四時二十八分汽車は仙臺停車場に着しぬ。余何の幸ぞ許されて再び同情溫き人の懷に入る可くなりぬ。喜悅の思を車上に託して新阪に到れば、彼れの夢は尙醒めずして其門戸は閉ざされたり。所在喬樹の上戛々として杜鵑の聲を聞く。幽情止め難し。戸を敲けば兄余を迎へぬ。室に入りて多く語なく唯相歡笑するのみ。感謝して朝食を終へし後、彼れは學校に出で行きぬ。余は机に向つて英一兄に致す可き書を書き初めたり。是れ布哇に送りて彼れが彼處へ寄港せし時之れを讀ましめんが爲めなり。凡ては絕大なる聖旨の中にあり、我れ等聖に等しきものの思ひ計り得る所にあらずと雖も、我れ等の祈若し熱からば神は我れ等の心を憐れみ給ふ可きか。彼れの上に失はれたる心歸り來れ。彼れ願くは此錬獄を美はしく勇ましく彼岸に達せよ。願くは余をして何時までも彼れの中心の同情者たり得せしめよ。

兄暫くにして歸り來りぬ。卽ち共に田邊氏に原先生夫人を訪ふ。其兒一藏君長じて肥えたり。羸弱永く我れ等の憂とせし其兒とは思はれざる許りなり。談話約一時間許りにして歸る。初夏の白日、庭前なる大枇杷樹を照らし何とはなきの思胸を射る。鶯の聲尙不絕聞ゆ。余は再び英一兄に致す可き筆を續けぬ。午後兄の授業終りし後共に携へて師團より昭忠記念碑のある所に散策す。山路巨木多く雉子の聲さへ聞えぬ。歸路早川萬一君を訪ふ。

彼れは妻あり家ある一個の鄕紳士となりぬ。彼れは此の如く活くるなるべし。

歸途煮て食ふ可く牛肉を求めて家に入りしに、原氏より鰻の蒲燒來り居れり。殘り少き飯を以て大牢の美味の如く食ふ。快言ふ可からず。此夜兄と藤村操氏の事を語る。兄も亦最も多く彼れに同情する一人なり。然り靈魂の苦しき經驗を有するものよく深厚の同情なきを得んや。

夜に至りて原氏夫人及び一藏君來る。閑談九時半に至る。夫れより愛子に送る可き日記を記す。淚屢々睫に逼る。余は今日甫めて彼女に英一兄が受けたる苦痛の凡てを語らんとするなり。余は彼女が此書を讀まん時、主の御助けの限りなからん事を祈る。然らざれば彼女は死せん。

寢ぬる前、久濶にして兄と共に所を一にして相祈りぬ。感謝す、主よ我れ等が父よ、君は實に塵の一片をも忘れ給はざるなり。

六月十八日。木曜日。晴天。

朝五時半起床。直ちに庭前の崖邊に到りて廣瀨川と青葉山とを遠望す。清爽の氣身に沁みて快云ふ可からず。主は此の如き偉大なる comfort を徒らには造り給はず。此慰藉は果して誰の受け得可き所なるや。

朝食後兄は學校に出で行けり。余は内村氏の「日曜講演」を讀みて例ながら興味を感じぬ。されども其中には理論の極めて loose なるものあり。氏は到底純文學を論ぜんには餘りに使徒的なるものなる可し。然かも氏が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Divini Comedia と Faust とを評し、前者は結論にまで達したれども後者は錬獄にして止めりと云へるが如きは、靈魂の經驗深きものにあらずんば云ふ能はざる所なりとす。

午後原氏の一藏さん來る。兄は再び學校に出でたれば余は彼れと共に唯赤子の如く遊びぬ。兄の歸り來りて後一藏さんを伴ひ、原氏に到り後二人にて北山の方を散策す。談ずる所多く歴史に關してなりき。

夜食後 Schneder を訪はんが爲めに再び外出す。家に到れば彼れは他の外國人等と會議をなしつゝありしかば、其儘にして靜肅なる街路を散歩す。此夜空美しく晴れぬ。仰ぎ見るに天路鏡の如く澄み、金星の影碧きに照りて實にや Venus の海より生れ出でたる樣の如し。家に歸りしは九時過ぎなりき。余は近來此の如く快心の散策を試みし事なし。家に歸り着きてより二人孤燈を挾んで、談我れ等の將來と我れ等が宗教に及びぬ。兄の堅信は依然として深く我が心の心を勵ますなり。我れ等の此世に生れしは實に徒事に非ず。我れ等が全心全軀を若し我が全胞我が骨肉の爲めに用ゐ盡すを得ば、感謝は如何に大なる可きぞ。我れ等の生涯は幸か不幸か此以外の事にては到底滿足す可からずなりぬ。願くは聖鞭我れを追ひて直き道を歩ましめ給はん事を。

兄の有する書籍の中他日の用になる可きものを拔きて下に記し置く。

Lewes, G. H.: A Biographical History of Philosophy. pp. 656.
Buckle, H. T.: History of Civilization of England, 1890. pp. 672.
Malthus: An Essay on the Principle of Population, 1888. pp. 551.

Fisher, G. P.: Reformation. pp. 620.
K. Marx: Capital, 1889. pp. 814.
Mc. Culloch: Ricardo's Works, 1888. pp. 584.
Achille Soria: Economic Foundation of Society. 1899. pp. 385.
Hegel, G. F.: Lectures on the Philosophy of History, 1 900. pp. 385.
Pausy: Three People.
Gunton, G.: Wealth and Progress, 1890. pp. 377.
Smith, G. A.: Book of Isaiah, 1901. Vol. 1,2. pp. 456, 474.
Wilson, J.: British Farming, 1862. pp. 519.

六月十九日。金曜日。晴天。

朝兄は學院に出でたれば、余は亦靜閑に讀書に耽りぬ。此日讀みたりし書は Buckle's "History of Civilization in England" にして、其 1st volume には introduction を載せたるが、是れ最も英人ならざる讀者に價値あるものなり。歴史を treat するに單に社會科學の智識のみを以てせず、自然科學によりて treat せらるる可き several factors が非常に夥多の關係を歴史に致す可きを說ける事甚だ詳細、是れを精讀すれば得る處確かに少少ならざる可きなり。又 "Thousand and One Gems" を繙き Wordsworth の詩を讀みぬ。何等深奥の沈想ぞ。誦する僅

に心の奥深く例ふ可からざる響ありて沈み行くを覺ゆるなり。

軈て兄歸り來りぬ。正午まで雜談し午後より共に携へて廣瀨川に到り水浴をなす。農學士も東北學院教授も此に到りて何者ぞとて二人思はず失笑しぬ。後入浴して歸る。庭前崖端に接して三抱へして猶足らざる大楓樹あり。綠蔭を稍傾ける白日の中に落して淸味云ふ可からず。兄と玆に坐して談は人生の問題に及びぬ。彼れも今は漸く其解響を求むるに、純理に依らんとするに到りぬ。人間存在の長さ、宇宙の滅否、神の人的方面、基督の神性等は我等の相語りたる問題なりき。思ふに從つて益々迷宮に入るは是等の問題なり。我れ等宇宙の前に一個の嬰に等しきものなれども何の用か理性の眼を授けられぬ。是を以て凡ての者を見なんとするに、凡ての者は voil にて蔽はるゝなり。聲は開く可からざる戶の彼方に響き、色は揭ぐ可らざる帳の彼方に動き、形は排す可からざる闔の彼方に立てり。在りと見えしものも理性を以て近づけば往々にして無きが如し。嗚呼、さらば此人心葛藤の因なる理性を殺了す可きか。智慧の果を味ひ知りしアダムの末裔は此の如き事能はざるなり。嗚呼信仰よ、而して理性よ、汝は何故に相反目するや、汝は何故に握手せざるや。我が衷なる戰は大なり。余再び嘗て多く味ひ知らざりし理性的懷疑の淵に陷らざる可からざるか。可し凡て可し。余は余が凡てを主の御手に任ぬ。放蕩なる末子を我が父は憐み給ふ事もやあらん。

暫時にして兄の友來りしかば、兄は家に歸りぬ。余尙樹下に殘りて尙志會が其雜誌に編入せる故高山樗牛子の遺文を讀み初めぬ。彼れは實によく戰ひたりしものなりしかな。彼れが中年までは、彼れは單に才氣迸發せる一

個感情強き、而して寧ろ批評的なる一個の論客に過ぎざりき。然かも彼れの若き晩年、彼れの肺患漸く重くして彼が單に好名好奇の念より眞面目なる自我に歸り來りし時に當りては、彼れの痛切なる懷疑悉く肺肝より出でて、余等をして同情の念衷に熱するを禁じ能はざらしむ。如何なる處にも如何なる時にも、眞面目なる人は祝福す可きかな。實に其人は神の國を見るべければなり。余は殊に彼れが此懷疑の中心に立ちて、克くその終焉まで戰鬪の生活を更へず、其勇ましき戰鬪の爲めには肉落ちて痛まず、骨細りて悲まず、肺破れて望を失はず、血を吐きて驚かず、向上の一念死も亦奪ふ可からざるものあるを多とせずんばあらず。男兒世にある宜しく克く此の如かるべし。死は易し、生は難し。終りまで生きて永久に生きて我れ等が探る可き道の如何なるものなるかを見ん。

此夜兄は其送別會に臨みぬ。余は依然として高山氏の「日蓮傳」を讀みて幾度か涙を零しぬ。兄の歸後談は悲しく戀愛の事に移りぬ。戀愛に對する觀念は、兄と余と大に其經行を異にせり。十一時半床に就きしが、余の心より僅かに壓へつゝある余の回想は、亂麻の如くむらがり立ちて余を攻めつ。余は弱きものなり。余は僅かの力を以て彼事を壓ふ。否余の全力を用ゐれども彼事は余の力を煩はす事餘りに多し。種々なる湧感は余をして長く床中に輾轉せしめぬ。されども多謝す可きかな「死」の妹は余を見舞ひぬ。彼女は余を寂滅の地に誘ひ行きて、余を深くかき抱き余は枯木の如く水平に横はりて曉に至りぬ。

六月二十日。土曜日。

朝は晴天なりしかども午後より曇れり。今日は兄一日閑暇なる可き日なり。朝より共に散策に出掛けんと約したれば彼れの誘ふまゝに北山と云へる墓地のある處に到る。余は昨夜より何とはなき一種の寂寥に打たれ、若し茲に兄なからんには今日の如きは一日又憂悶の客たる可かりしも、兄のあるありて僅かに慰められつゝ漸く田園の風趣に近きぬ。古刹の雨露風打幾十年若くは幾百年ならんとするものあり。見るに閑古の香韻胸を刺す。此邊又瓦燒の家多し。竈に燃ゆる火色の赤く輝く飴を解きたるが如く、烈々として竈内に滿つるを見て、兄は「美はしきかな火の色、古代の民が拜火の宗教を起せるもの理なきにあらず」と云ひぬ。實に爾かなり。余は Schiller の鑄鐘賦を想起しぬ。かくて北山に到り其處に Faust 夫人の墓の憐れにも路人の爲めに荒されたるを見て、日本人の今更ながら禮を知らざるの甚しきに驚き且つ悲しみぬ。實に人の墓に禮を失するとは是れ單に粗暴とのみ見て用捨す可き事に非ず。日本の民が宗教的信念に乏しく、生者に對しては力足らざるが故に責めで、死者に對して無意義なる反抗を試みんとする卑劣心の潜めるを見ずんばあらず。

行く程にこゝらの墳墓共に小さくして美しからざるが如く、無緣となれるにや倒れたるもの、頽れたるもの至つて多く、夏草の滋り漸く多くなれるに悲慘なる contrast をなせる樣悲し。

歸路、一農家に野薔薇の色紅に燃ゆるが如きを買ひ、長谷倉氏の墓ある寺を通りて當時の回想を語りつゝ、原氏に到り一藏さんを寫生して家に歸る。半日の遊凡て何ぞ淨きや。午後より原氏夫人來られしかば雜談に時を移し夕刻より兄の家を辭す可き仕度をなして家を出で、Schneder の家に到り（Schneder とは東北學院々長なり。

兄の云ふ所によれば彼れは溫厚篤實の君子人にして彼れに心服せざりし人なしと。兄の如きも甚だ同氏に傾到せり。彼れは今日余を其晩餐に招けるなり)其晩餐に列しぬ。夫婦及び三孃ある其家庭は實に美しきものにして然かも其質素は殊に余の意を悅ばしむ。Schnederは余の爲めに多く米國の風俗を說く事精しく余をして得る處多からしめたり。八時半家を辭して停車場に向ひぬ。原氏夫人旣にあり。かくて八時五十分の汽車に乘じて仙臺を去りぬ。懷かしき仙臺を去りぬ。旅人に懇ろなりし仙臺を去りぬ。夜は暗く窓外は風荒めり。冷氣膚を刺す許りなり。

六月二十一日。日曜日。

一人の陸軍砲兵少佐と同乘して、今朝靑森に着きぬ。余は彼れと語るを好まざりしかば、默しつゝありしが彼れ遂に余に語りぬ。談は一年志願兵の事に及べり。彼れの是れに就て語る所は余を噴飯せしむ。彼れは曰く「我れ等の一年志願兵を置くは、智識あり富貴なる階級を軍人となし以て軍人の威嚴を一般國民に廣むるにあり、以て軍人の品位を高むるにあり」と。而して彼れの枕頭には妖妓の寫眞を其表紙となせる團々新聞ありて橫はれりき。かくて靑森に着せしは七時四十分頃なりき。

空は昨日の如くかき曇りて、風は少なからず荒れ居れり。汽船東海丸に乘じ十一時出航す。船中往々嘔吐の聲を聞きたれども、余は幸に何の苦痛をも感ぜざりき。午後五時四十分函館に入りぬ。昔に變らず臥牛の山、巴形の水、北海の風光は先づ余の眼を過りぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com